

ナバホの神話と砂絵研究序論

加 藤 薫

はじめに

神奈川大学経営学部はカンサス大学学生交換プログラムに基づき、同プログラムで来日する米国学生に対して日本語・日本研究の短期カリキュラムを提供している。1993年には約二十名の同プログラム交換学生を受け入れたが、その中にナバホ出身で「砂絵」制作の資格を持つデニス・リー・ロジャースがいた。(注1)デニスは日本文化の吸収に意欲的であったと同時に、ナバホを含むネイティブ・アメリカンの伝統文化の紹介にも熱心で、砂絵公開制作の企画に応じてもらった。

こうしておそらく本邦初の砂絵公開制作が1993年6月18日に湘南ひらつかキャンパス61号館250番大教室にて、約120名の神大学生を前にして実現した。画材のほとんどはデニス自身が持参してきたものを利用させてもらったが、支持材の幾つかは日本で用意せねばならなかった。特に下地に使う大量の白い砂については、日本では一般的な海の砂(貝の細かい碎片成分)がナバホの伝統的砂絵には使えないと判明し、川砂調達のために東京・横浜の画材店に片っ端から電話した事は今でも覚えている。このことを除いても、筆者も初めて目にした砂絵の制作実演場面はとても印象的だった。

筆者はその後1995年にニューメキシコ州タオス市郊外にある全米でも最大の砂絵コレクションを持つウィールライト・ミュージアム・オブ・アメリカン・インディアンを訪れ、数人のナバホ・アーティストとも交流し、あらためて砂絵の世界とナバホ神話、ナバホ文化への興味をかき立てられた。にもかかわらず主として筆者の怠慢で研究は遅々として進まず、研究ノートもなかなか埋められないままである。本稿は事例に基づくナバホの砂絵研究に入る前段階の序論として提出するものである。

1. ナバホとは

＜地理＞

ナバホとは、全米では最大のリザベーション（居留地：約二万九千平方マイル＝約七百三十ヘクタール）を有するネイティブ・アメリカンの一部族の名称である。このリザベーションはアリゾナ州北東部、ユタ州南東部、コロラド州南端部、ニューメキシコ州北西部にまたがる地域を占めているが、地理条件からくる気候差は大きい。（注2） リザベーションに指定された地域は、一部が今はナバホの神話でのみ語られる白人到来以前の支配地域と重なるが、このリザベーションが設定された1868年に、それ以前の支配地域が全て認められたわけではなかった。

ナバホ神話に依るナバホの世界とは、四つの聖なる山に囲まれた空間であり、現在の地名に当てはめると、東端はコロラド州のシエラ・ブランカ・ピーク、南端はニューメキシコ州のマウント・テイラー、西端はアリゾナ州のサンフランシスコ・ピークス、北端はコロラド州のラ・プラタ・マウンテンズ（あるいはマウント・ヘスペラス）とするのが定説となっている。（注3）

＜人口＞

ナバホ人口は、リザベーションの設立された1863年時で居留地内人口は8千人程度だったが、以後増加傾向を維持し、1990年の国勢調査時には14万6千人を越え（注4）、1998年時には22万人を越えた。年齢別人口構成比を見ると30歳以下の人口が約60%を占めていることから依然増加傾向にあると見てよいだろう。ちなみに1960年からの年平均人口増加率は2.31%である。このリザベーション内に住むナバホ人口は全ナバホ人の約90%である。残りの10%はリザベーション外に住み、中にはカリフォルニア州ロサンゼルス市などまったく地縁関係のない大都会で孤立した生活を送っている家族もある。

＜言語＞

太平洋戦争時には日本人に理解できない暗号用にとナバホ語が米軍に採用されたが、ナバホ語は言語学的系統ではそれほど特殊というものではなく、言語ファミリーと確認されているアサバスカン語群（注5）の中で二十ほどある方言の一つであり、アパッチ系言語も同一の言語群に属する。

そもそも「ナバホ」の名称は、言語系統的には無縁なプエブロ・インディアン

語のなかでもタノア語から派生したテワ語の土地名称Navahuu(小川に隣接した耕した畑)が、スペイン人修道士サラタ・サルメロンの記録に、プエブロ・インディアンとは別個な集団を示す表現として登場してから一般化したものである。(注6) ナバホは自分たちのことをディネ(Diné=人々)と呼ぶ。生まれ育った故郷はディネタ(Dinétah'=人々の間にあるもの)と呼んでいる。

＜社会構成＞

ナバホのリザーベーションでは現在60以上のクランが確認されているようだ。(注7) その中には19世紀後半以降に新たに加わった、メキシコ系やプエブロ・インディアン系のクランも含まれている。ナバホ人全体のクラン構造を示すような見取り図は未だ作成されていないが、実生活では同一クラン内での男女の結婚は認められず、また結婚に際しては男性が女性側のクランに組み込まれること、男女とも社会生活では自分の属するクラン以外に、最低四つの血縁関係にないクランの人々と結びついた活動が求められること、ただし基本的な日常生活では自律的バンド単位で行動することなどが確認されている。(注8)

こういった不文律があるにもかかわらず、近隣のプエブロ・インディアンと比較した場合、ナバホ人は極めて「個人主義的」とであると指摘されている。(注9)

その起源直後から定住・農耕生活が基本で、「集団主義的」発想で文化伝統が築かれてきたプエブロ・インディアンに対して、起源は移動と狩猟・採集の民族であり、農業や牧畜、定住に伴う生活技術などは全てプエブロ・インディアンから学んだとされるナバホの歴史や価値観、行動規範の特色を「個人主義」というラベルで表現している。

1924年代以降、ナバホ人はアメリカ合州国市民であると確認された後、ナバホ・リザーベーションはアメリカ合州国内の一ネーションとして独立した統治組織をもつことが許されており、アリゾナ州ウインドー・ロックに議会と行政本部がある。議会は四年任期の男女七四名の評議員で構成され、選挙人名簿に登録した二十一才以上の住民の民主的な選挙によって選出される。(注10) このナバホ全体の行政組織が伝統的なクラン構成とどのような関係にあるのか未調査である。

アメリカ合州国市民として認知されたということは、また市民としての義務も生じるということであった。徴兵あるいは志願によって軍属となったナバホ兵士が義務として海外での戦闘に参加し、負傷したり死亡する例も出てくる。ここで

新たな神学的問題が発生した。異国の地で非ナバホ人の手によって埋葬、あるいは火葬されたナバホ人の身体性や魂はどのように扱われるべきなのか、近代的な病院での医師による医療行為がナバホの定義する「治療」とどこまでが同じで何が異なるのか、手術などによって失われたり、切除された肉体の一部についてはどのように考え、どう対処すべきなのか、という問題である。このような問題意識はナバホの神話やライフスタイル、価値観、宇宙と世界の認識に由来するものであることは疑いない。

2. ナバホの歴史

ナバホ語を含むアサバスカン語は、現在アラスカからカナダの太平洋沿岸地帯に分布するトリングット、エイアク、ハイダといったネイティブ・アメリカンの言語と同一のナ・デネ語族に属する。ナ・デネ語族はシナ・チベット語族やコーカサス諸語と関連し、広義のデネ・コーカサス語族の一部である。(注11) アサバスカ語は現在でもアラスカ(コユーコン語、クッチン語など)、カリフォルニア州北部(フパ語、トラワ語)、東部のハドソン湾(チペワイアン語)に残っており、アメリカ合州国の最南端で使われているのがナバホ語とアパッチ語である。言語分布ではさらに南のメキシコ共和国北部でも使われている。非常に広範囲に分布しているわけだが、これは民族移動の結果であろう。

言語系統からナバホの歴史を再構成を試みると次のようなことが推測されている。(注12) すなわち、ある時何らかの方法でベーリング海峡を越えて、アジア北部あるいはシベリアからアメリカ大陸最北部にデネ・コーカサス語族集団が移動してきた。さらにアラスカ南部からカナダへと南に移動して行く過程で幾つかのグループに分かれ、ことなる南下ルートをとった。このうちロッキー山脈東側斜面沿いに南下してきたグループがナバホの祖先である。ナバホの祖先たちがサウス・ウエスト地域にたどりついた時期は、紀元1000年頃から1300年代まで続くこのサウス・ウエスト地域から大平原地域、そして南の現メキシコ領北部を巻き込んだ継続的な民族移動の波の最終段階で、13世紀後期に数回は記録されている大洪水によるアサバスカン語族登場以前に定住農耕生活を始めていたブエブロ・インディアンたちの祖先の社会崩壊の後、すなわち14世紀中頃と推定されている。(注13) アサバスカン語族の南下の波は16世紀初頭まで続き、その

分布もテキサス、カンサス、オクラホマに広がった。(注14)

こういった歴史をナバホの創世神話から再構成するのは容易ではない。ナバホの伝承神話は基本的に「空間スケープ」描写が中心で「時間スケープ」の手がかりをほとんど示していないことに依る。(注15) すなわち「～のあるところ」とか「～のいるところ」というような描写と、人間や動植物それに聖なる存在との出会いの描写にあふれているが、我々の共有する時間軸に沿って再構成するのが極めて困難なのだ。

ナバホの創世神話において、時間系列に基づく手がかりといえ、現在のナバホたちが存在する「第五の世界」に至る創造と破壊のプロセスである。第一の下層世界から始まり、何らかの理由(洪水が多い)で世界が崩壊するか犯罪行為によって前の世界から追放され、その度に空に上昇し、上層にある次の世界にしばらく安住するという物語だが、これが民族移動の歴史的時系列に対応していることは疑いないにしても、前の下層世界から次の上層世界への移行がいつ、どこで起こったことなのかまではわからないというのが現状である。

レックス・リー・ジムは、第一の世界の記述に見られる気象の物理現象が北のツンドラ地帯の状況を反映し、第二の世界の記述にでてくる生物描写がカナダ中央部や西海岸にいるものと対応していると述べ、さらに第三の世界の山や平原、川の描写といった空間スケープがロッキー山脈東側斜面から見た光景に対応している、とする。(注16) そして第四の世界からニューメキシコ州北西部に到着し、そこを故郷(Dinétah')とする記述が始まっていると考えている。(注17)

現在が「第五の世界」であるという認識は、アステカやマヤといったメソアメリカの古代文明にも共通して存在した考えである。しかし例えばマヤ人たちが時間=暦を驚くべき正確さで計測し、「第一の太陽の時代」の始まりを紀元前2万3619年前後(注18)としているのに比べ、あいまいである。

ここで、マヤ人のように時間に対する強迫観念が希薄であるというナバホ神話の特徴が見いだされる。その代わりに土地とか自然環境の記憶が肥大化しているようだ。そしてこの自然環境や土地へのこだわり、かかわり方がナバホのライフスタイルや思考を形成しているわけだが、この点を明らかにしてゆくのが次の作業ということになる。別な言い方をすれば、ナバホが把握している空間=大地がまたナバホの精神世界と一体化しているということであろう。そしてこの「精神

世界としての大地」というコンセプトがまた大地をキャンバス代わりに使う「砂絵」制作という行為と深く結びついているのだ。(注19) しかしこの点もまた明らかにしてゆく作業の前に、まず「第五の世界」の後半に対応する、最初の白人＝スペイン人との出会い以降の歴史を概観しておこう。

ナバホ創世神話の「第四の世界」の記述から、サウスーウエスト地域で先に定住と農耕生活を始めたプエブロ・インディアン文化から様々なものを学び、人口も増えてゆく様相が読み取れる。(注20) そしてナバホの思考方法を理解する上で鍵となる、「対立する二つの要素の調和」という二元論的原理も確立されてゆく。「第五の世界」の記述になるとナバホ傘下に次々と新しいクランが吸収・同化されてゆくプロセスが明らかにされ、合わせてナバホのディネタの空間範囲も明確になってゆく。

「第五の世界」の物語記述はある程度解説が可能である。我々の用いる時間軸に沿って歴史的フェーズに再構成すると、1650年頃までは狩猟と採集、移動と略奪といった伝統的ライフスタイルを維持しつつ、近隣のプエブロ・インディアンの生活文化を観察し、有用なものをアレンジしながら取り入れていったフェーズであり、クラン同士の融合(近親結婚の忌避や生活技術の共有、分化)など社会制度構築を模索していた。共同作業による灌漑工事などの試みも始められた時代である。

スペイン人との接触から新たな文化要素の習得が始まったのは1650年代以降と考えられる。新しい動物である羊や馬の飼い方、伝統の綿織物に加え新たに羊毛を使った織物の手法、銀やターコイスを使った装飾品制作を学び、ナバホの神話や儀式の中に組み込んでいった。1680年の「プエブロの反乱」と1692年のスペイン人による「レコンキスタ」の結果、スペイン人とは政治的敵対関係に陥ったが、スペイン人の報復をさけるために多くのプエブロ・インディアンたちがナバホに合流してきたため、ナバホの文化水準が高まるという効用もあった。

1775年から1863年はキャニオン・デ・シャイ(Canyon de Chelly)フェーズと定義されている。(注21) 南のメキシコから移住してくるスペイン人系植民者(実際にはメスティーソが多数だったと言われる)、東の平原部から襲ってくるコマンチ人、北から略奪を繰り返すウテ人との抗争に疲れ、西の現アリゾナ州北東端に大移動した。この約90年間にナバホ文化は芸術面でも宗教面でも大発

展した。生活基盤は農業と牧畜中心となったが、急激な人口増に対応するため馬や動物の供給を増やす必要があり、また奴隷として売るため発生するナバホ女性や子供の強奪に報復するためもあって、近隣社会への略奪行為も頻繁化した。当時のナバホ社会は対等なクランの連合体であり、部族全体よりもクラン毎、バンド毎の意向が優先したようだ。そしてこの政治的脆弱さが1864年の悲劇へとつながる。

1846年のアメリカ・メキシコ戦争の結果、メキシコから新たにサウスウエスト諸州地域を獲得したアメリカ合州国連邦政府は、ナバホと条約ベースで和平関係を築こうとした。しかしこういった条約を結んだナバホの指導者は自分のクランやバンドのみを代表する立場でしかなく、条約を結ばない他のクランやバンドの反アングロ的敵対行為まで拘束できなかった。そのためアメリカ合州国側には、条約が破棄されたと判断された。

市民戦争（南北戦争）終結直後からアメリカ合州国陸軍によるナバホ攻撃がはじまり、1864年に全ナバホ人口の約半分といわれる9000人近くのナバホ人がボスケ・レドンド（フォート・スムナー）に捕虜として強制収容された。キャニオン・デ・シャイからボスケ・レドンドまでは約500キロあるが、この道を徒歩で歩かされた。この「死の行進」で足手まといになる病人、けが人、老人、赤ん坊は容赦なく殺され、収容所到着後も病気や食糧不足で1年間に2000人が死亡したと言われる。（注22）

この非人道的扱いはさすがに問題となり、1868年には現リザベーション（当初の面積は350万エーカー程だった）への帰還が許された。またクラン毎に独立したいナバホ集団のためにこの主リザベーションとは別に、ラマー、キャニオンシート、アラモの3か所に小さなリザベーションが設定された。疲弊したナバホ人の心には、拠り所となるエスニックなアイデンティティの最構築が急務であったが、その面で貢献したのは、ボスケ・デ・レドンドに収容されず、数十人から百人単位で逃亡生活を送っていたナバホ集団であったと言われる。（注23） こういう集団のほとんどがリザベーション設定後にボスケ・デ・レドンド帰りのナバホ人たちと合流したわけだが、逃亡生活の間に伝達可能かつ強固なものに作り替えた神話・伝承を持ち帰ったのだ。これが現在我々に理解可能なナバホの神話・伝承の世界である。

ナバホとアングロの出会いの悲劇的な結果は、一方ではアングロのナバホ文化への興味をかき立てた。その目的が少数民族に対する帝国主義的支配と支配者文化への同化を確実に促進するものではあったことも確かだが、失われてゆく文化へのロマンティックな想いも作用した。いずれにしても19世紀第三四半世紀頃からナバホと直接接触する機会の多かった職業軍人を中心にナバホ文化の記述が増加し、二十世紀のアメリカ民俗学や人類学の基礎となった。(注24)

問題は現在に至るまでナバホ人がナバホ語で記述した文献が存在しないことであろう。ここで翻訳、通訳の問題が生じている。ナバホの神話・伝承に関するフィールド・ワークのほとんどは英語のできるナバホ人の通訳を介して英語で収録されたものである。数少ないナバホ語を理解するアングロ人による記録も英語で表記される。インフォーマントや通訳者、記録者が意識するしないにかかわらず、言語の支配構造が成立せざるを得ない。また我々の使用する言語にからめ捕られた認識の枠組みから逸脱した要素は、どこかで捨て去られている可能性もある。だから我々の理解するナバホの物語なるものは、最終的には全て「... ということだろう」というレベルのものだ。またナバホの神話・伝承、儀式口上などはチャント（口誦）の形式で伝えられるものだが、そこの発生するリズムや間合い、声の強弱高低などは文献からはとらえることができない。

こういった制約や限界があるにもかかわらず、ナバホの精神世界を探るということは、そこに人類の知性がかかわる限り、いつかは理解可能な道が開けるといふ楽観主義が存在する。しかし、わからないことをわかろうとする努力の先に何があるか定かではない。そしてナバホ人の理想とする「調和」の世界に導かれるものなのか、それが幸せなことなのかもわからない。ただ、ナバホの精神世界に脈うつ自然や大地、ひいては宇宙との「共生」観とそこに人々を導くための「知恵」には、何か未来の指針になるものがかくされているとの予感があり、砂絵研究はその糸口となればと思っている。

<脚注>

- (1) カンサス州トピーカ市にあるウオッシュバーン大学学生(当時)のDennis Lee Rogersのこと。ハスケル・インディアン・ジュニア・カレッジ卒。アリゾナ州北東部にあるナバホ・ネイション(リザベーション)出身で、メディスンマ

ンの家系に育つ。1991年に部族伝統のキュアラーの資格を取得し、特定の治療目的のために ホンモノの砂絵制作が許されている。

- (2) 居留地の標高は1600mから3800mと起伏に富んでいる。植生を見ると、標高3000m以上の場所ではボンデロサ松とダグラスファー、アスペン、スプロースで占められ、標高2500m以下の場所ではピニオン、ジュニパーなどが茂るが、大地は砂岩地となり、標高が下がるにつれ、セイジなどのブッシュしかみられなくなる。

雨量は標高2500m以上の高地では雪が降るため年間40～170cmに達するが、それ以下の低地では年間15cm以下の砂漠が広がる。年間平均気温は標高2500m以上の高地でマイナス20度Cから4度Cと低い一方、それ以下の低地では0度Cから11度Cである。統計の魔術だが、低地では日中気温が35度摂氏を越えることもめずらしくない。夜間には急激に気温が低下するので平均すると低くなる。

- (3) Native America in the 20th Century - an encyclopedia, Garland Reference Library of Social Science, vol. 452, 1994, p. 379参照。同様の記述はナバホ神話関係の文献のほとんどにでてくる。

- (4) 残念ながら2005年度版(2004年集計)のデータはまだ未確認である。統計上の問題は常につきまとい、ナバホのリザーベーションに住む非ナバホ人口の区別、ナバホリザーベーション以外の全米各地に住むナバホ人の正確な実数は自己申告なので推定である。国勢調査ではおおざっぱなネイティブ・アメリカンという区分までしか公表されない。1990年の国勢調査時の選挙人登録者は約10万5千人で平均年齢は18.7才。ナバホ語を母語と登録した人数は11万5千人弱。このうちナバホ語しか使えない／使わないと申告した人数は約2万7千人だった。Native American in the 20th Century-an Encyclopedia-,
ibid., P. 382. 参照。

- (5) The Athabascans のこと。ここの記述は主に Bertha P. Dutton, American Indians of the Southwest, University of New Mexico Press, 1983(rev. ed.), pp. 63-64 を参照。
他に National Geographic Society eds., The World of American Indian, p. 150など。

- (6) 多くのナバホ文献に同様の記述が見られ、定説のようなだが、最初にこの記述の
ててくる文献はまだ特定できていない。本稿のために Celia Taylor, *The
Native Americans, the Indigenous People of North America*, p. 55 を再確認。
- (7) *The Gale Encyclopedia of Native American Tribes*, vol. II, 1998, pp. 217-
218を参照したが、人類学者の調査時期、クランやバンドの定義区分の違いに
より数字は微妙に異なってくる。ゾルブロッドの再編集したナバホ神話の「第
五の世界」の記述から推察されるクランの数は30~40になる。(Zolbrod, Paul
G., *Diné Bahane' The Navajo Creation Story*, The University of New Mexico
Press, 1984. 邦訳：金関寿夫・迫村裕子訳「アメリカ・インディアン神話ー
ナバホの創世物語」大修館書店, 1989.)
- (8) *The Gale Encyclopedia of Native American Tribes*, *ibid.*, p. 217. 参照。
- (9) この点を強調したものに Mircea Eliade ed, *The Encyclopedia of Religion*,
vol. 10, Macmillan Pub., 1987, pp. 337-339, がある。現代ナバホの治療行
為が結果として個人の長寿や個人の救済をもたらすものであることは知られて
おり、この側面からの結論である。
- (10) 加藤薫著、「ニューメキシコ 第四世界の多元文化」、新評論、1998、p. 153。
- (11) バーナード・コムリー、スティーヴン・マシューズ編、片山房訳、「世界言
語文化図鑑」、東洋書林、1999、. 130, p. 139参照。
- (12) ここの記述はDutton, *ibid.*, p. 63. を参照。
- (13) Dutton, *ibid.*, p. 64, *Encyclopedia of World Culture*, vol. I, 1991, p. 250 な
ど参照。
- (14) Dutton, *op. cit.*, pp. 64-65. バーナード・コムリー他、*ibid.*, p. 130, など参
照。
- (15) 見出しに Space Scape, Time Scapeといった用法が採用されていたのは、
National Geographic Society, *The World of the American Indian*, *ibid.*, 第1章
である。
- (16) この仮説は*Encyclopedia of Noth American Indians*中収録のRex Lee Jimが担
当したナバホ神話の記述に登場する。

考古学的根拠を加えて当該説を紹介した文献に *The Gale Encyclopedia of
Native American Tribes*, *ibid.*, p. 217がある。

- (17) ゴルブロッド、ibid., p. 79から第五の世界の記述が始まるが“Dinétah”という言葉が登場するのはp. 435になってから。
- (18) マヤの長期歴によると現在は紀元前3114年に始まる「第五の太陽」の時代で、2012年に終焉すると計算している、ここから「第一の太陽」の始原を逆算するとこの概略数字がでてくる。
- (19) 砂絵という用語で統一表記しているが、邦訳としては「砂のオルター」、「砂のモザイク絵」、「地表絵」、「地上画」などの使用も可能。ナバホ語“iikáah”を直訳すると英語では“dry painting”となるが、意味は「聖なる人々＜精霊たち＞が来て去って行く場所」である。Native American in the 20th Century-An Encyclopedia, pp. 170-171に定義にかんする詳しい記述があり、参照。
- (20) ゴルブロッド、ibid., p. 79以下の記述の要約。
- (21) 英語読みではキャニオン・デ・チェリーとなるがあえてナバホ語の読みで表記。この時代区分の用語はThe Gale Encyclopedia of Native American Tribes, ibid., p. 217に登場。
- (22) この出来事に関する記述は様々な文献で語られてきている。数字についても様々なデータがあるが、連行されたナバホ人の人数は8000人から9000人の間に収まっており、死亡者の数も1200人から2500人と計算されている。どう考えても少ない人数ではない。
- (23) この点を指摘した唯一の文献はThe Gale Encyclopedia of Native American Tribes, ibid., p. 218。
- (24) アングロ白人側の学究的な調査の歴史やアメリカ合衆国の民族学、民俗学、人類学発展への貢献についてはNational Geographic Society, The World of the American Indian、第二章に詳しい記述がある。